



遠隔授業

Case 01

保健医療学部 看護学科

科目名 ▶ 成人看護学実習II

対象学年 ▶ 4年生

導入ツール ▶ Zoom

＼お話を伺ったのは／

看護学科

ただ

武田かおり 講師



通常授業（病院実習）

学生が1人の患者さんを受け持つ、3週間の病院実習。健康障害のある患者さんを対象に、その健康問題を理解し、健康レベルに合わせた看護援助が実践できる能力を養う。



全体を見る



実習インストラクター



受け持ち



患者



実習指導者

遠隔授業

患者さんの様子をできる限りリアルにイメージしてもらいながら進めた実習。コロナ禍の状況をふまえながら、紙上→音声→対面とステップアップ。

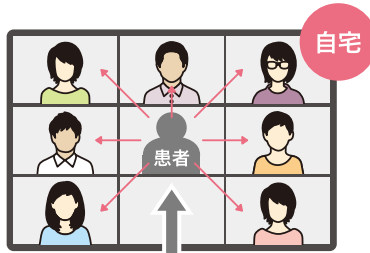
Step1 紙上で

病院の協力を得て、患者事例を作成。
よりよいケア計画を考える



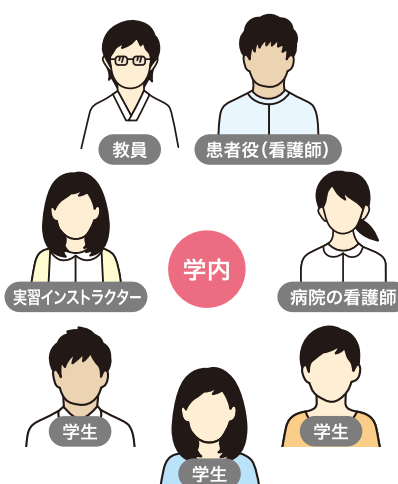
Step2 音声で

患者役を務める看護師を相手に
学生たちが直接インタビュー



今後 Step3 対面で

病院の看護師が来学し、患者役とともに
学生たちとディスカッション



難しいと思われた病院での実習を、遠隔に移行できた理由とは？



「成人看護学実習II」は、4年間の集大成とも言える重要な実習です。学生たちは、複数の病院に分かれて、病院実習を行います。新型コロナウイルス感染症の流行の影響で病院での実習が「非常に困難」という判断に。それが、文部科学省からも厚生労働省からも、実習にかかわる新たな指針がまだ出ていない4月の段階でした。

「最終学年の、来年には現場に立つ学生たちに、果たしてどんな実習をさせることができるのか」それを担当の先生方と考えた末、実習先の病院の協力を得て、患者事例を作成することにしました。その患者情報を基に、患者さん一人ひとりに合わせた看護という「病院実習の本質」を掴んでもらえるような組み立てを考えました。

◀ たくさんの方の協力と先生方のアイデアで遠隔での実習が可能に。

遠隔実習の流れ Step1

4つの事例を作るにあたって、看護師や医師、理学療法士の記録などを具体的に想定し患者情報を作成しました。また、患者さんの性格がより伝わるようなイラストをこちらで描き添え、どんな目的で、どんな風に入院しているか、よりリアリティを持って学生たちに実感してもらう工夫もしました。

病院実習では、大学教員または補助教員の実習インストラクターと、病院の臨地実習指導者という指導看護師が、学生が作成したケア計画を確認して指導します。

遠隔実習においても、患者情報を基に、学生が「今日はシャワー浴の介助をします」「足の爪を切ります」「食事の介助をします」…といったことを、実習インストラクターに確認する段取りを踏みました。その際実習インストラクターは、学生が考えたこと、例えば「シャワー浴の介助をするなら、なぜシャワーなのか、なぜ入浴ではないのか、なぜ体を拭くことではないのか」という質問をします。それに対して学生が、自分の知識と知恵を駆使して、そのケアでなければならないことを説明します。

そういったやりとりを重ねた結果、より良いケア計画が出来上がります。しかし実際にはケアは行えないので、1日の終わりに実習インストラクターがそのケアを行った想定で、学生にその時の患者の様子やケアの効果などの結果を伝えます。「シャワー浴では、背中が洗えなかったけれど、手伝ってもらって良かったと話していた」など、実際に患者さんがどう感じていたか、その場に患者さんがいるかのような様子を考えて、学生に返します。その結果を受けて、学生は「明日、もっとうまくいくためにはどうしたら良いのか」を考える、そういったやりとりを何度も何度も繰り返しながら看護の実践力を少しずつ積み重ねていきました。

教員との問答をくり返ししながら看護の方法を考え、深めていきます。

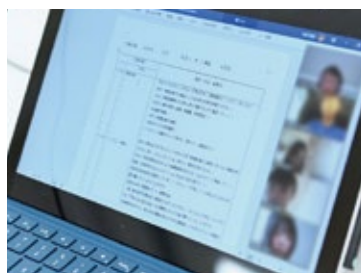


今日は患者さんにシャワー浴をします。

なぜ入浴ではないのですか？

患者さんの体力が低下しているからです。

体を拭く方が負担にならないのでは？



1日限定のコミュニケーション。それでも成長を見せる学生たち。 Step2



実際の声を聞くチャンス！

▲患者さんの性格がより伝わるように描き添えられたイラスト。

遠隔実習ならではの問題点、それは、患者さんとの関係性を築けないことです。普段だったら直接患者さんに聞ける話が聞けない、笑顔ひとつで分かることが分からない、コミュニケーションが取れない、そこが遠隔ならではの辛さでした。

学生と患者さんとの関係性をどうにか作れないかと考え、患者さんとのオンライン上でのインタビュー機会を設けることにしました。…とは言っても、患者さんはご本人ではなく、患者役の方が声を担当し、顔はイラストで表示。音声をつなげて、学生が直接質問できる機会を作りました。患者役には看護師の方にご協力いただきました。長年の経験から、事例の疾患を持つ方のおおよその特徴を理解しつつ、なおかつ教育目的も理解し、患者役を担ってくださいました。

インタビューは、学生たちが6名前後のグループに分かれて実施します。事前に、自分たちで「何を聞く？誰が聞く？どう聞く？」と話し合っ、当日を迎えます。実際は患者さんではなく、患者役の看護師さんに接するのですが、学生たちは患者役とは思っていないような印象を受けます。生身の声を聞き、そこに本当に患者さんがいると思って、緊張感を持って

話す様子が伺えます。そして、インタビューを通して、学生たちの患者さんに対する印象が、一気に紙上から人へと、2次元から3次元へと変わっていく、そんな瞬間を見ることができます。

遠隔実習の中で、顔は見えていないけれど、そこにいるのは人間なんだ、一人ひとりの生活が、人生があるんだ、そこは学生たちにどうしても理解してもらいたいと考えていた部分です。



▲直接インタビューの様子。それまで紙上で患者さんの情報を得ていた学生たちが、声を通して、リアルな患者さん像を掴みます。



今後の予定 Step3

以上が、6月までの動きでした。今後、遠隔に加え、徐々に対面型の授業が始まります。今回実習先の病院から、学生へのコミュニケーションを含めた看護ケア技術への指導に協力していただけることになりました。分散登校など3密を避けた形で学生たちに大学に来てもらい、患者役の看護師の方と直接対面してもらおうかと考えています。さらに学生には、その看護師さんを相手に自分の看護を実践し、実習先の病院から招いた看護師に直接指導いただく機会を作りたいと考えています。病院からの協力を得られたおかげで、より深い遠隔実習を進めることができたと思っています。